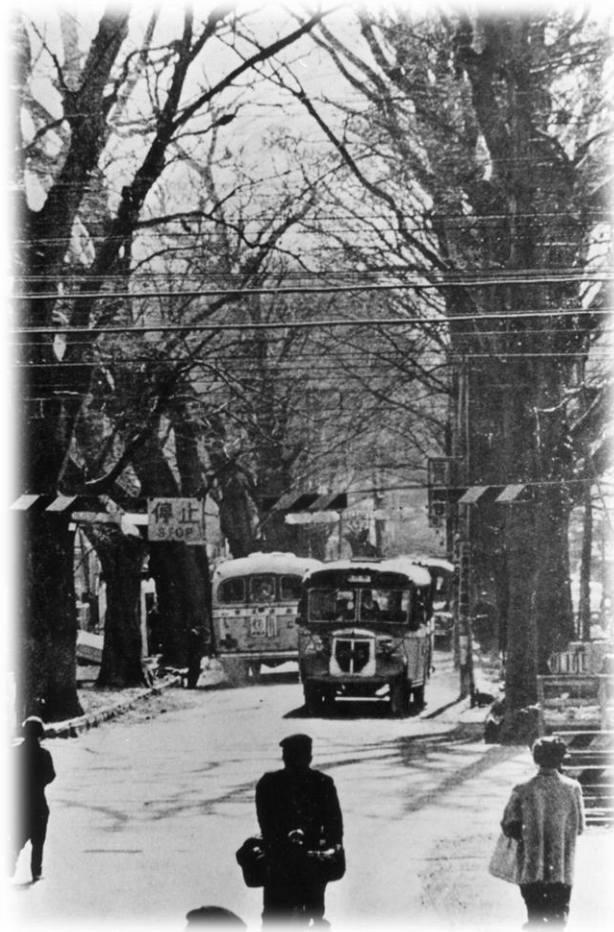




こども府中はかせ 12

みち 府中の道



左側写真：けやき並木と桜通りの交差点から大國魂神社の方を望む
右側写真：けやき並木にあった京王線の踏切

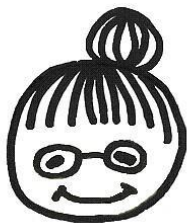
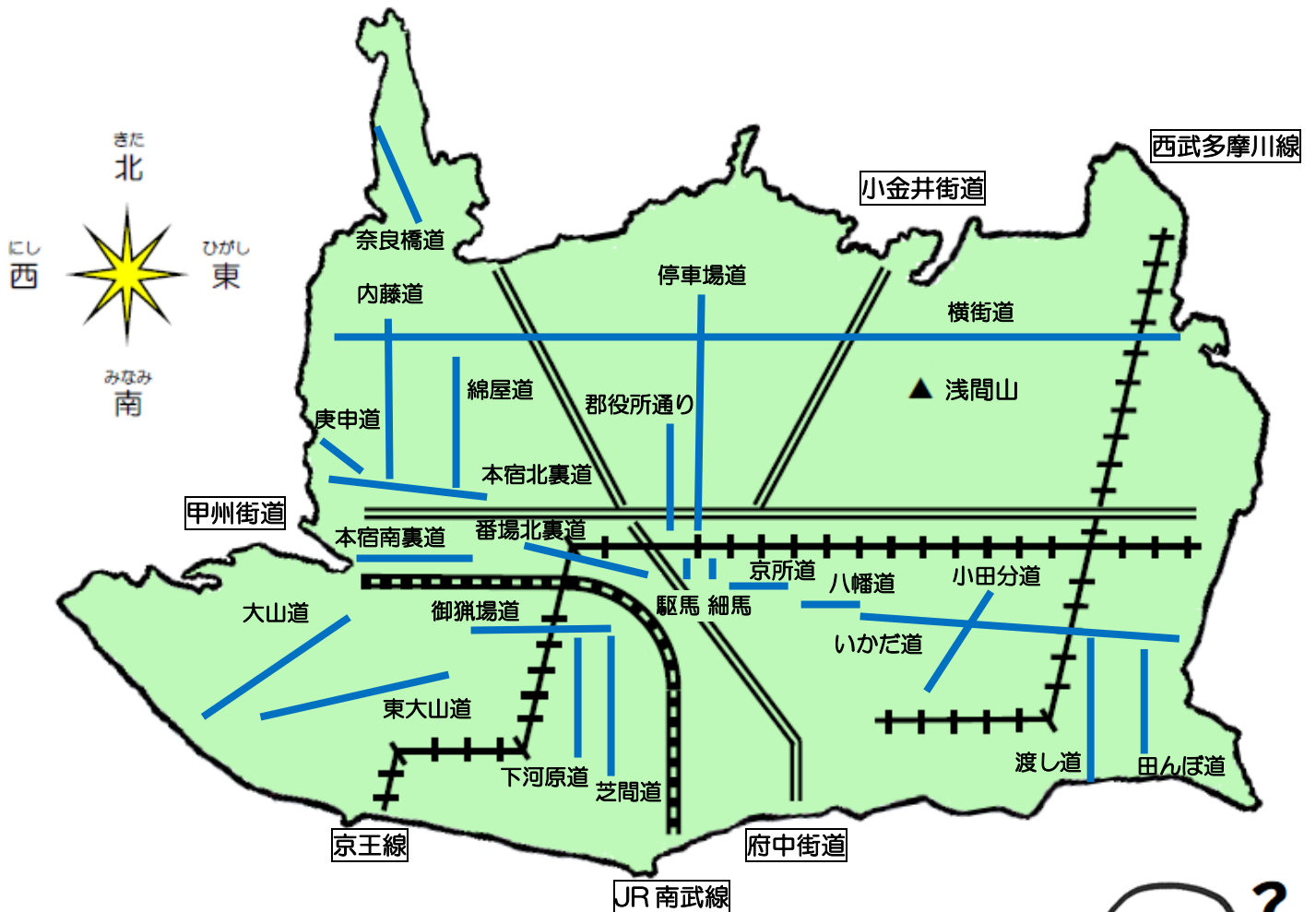
こども府中はかせ9「府中の街道」では、甲州街道や鎌倉街道のようなほかの街へ通じる大きな道路や、人見街道や御茶屋街道のように歴史がある道を取りあげましたね。
そこで今回はみんなが普段の生活でよく使う、より身近な「府中の道」について見ていきましょう。



もくじ

ページ 2 な ら はし みち 奈良橋道	ページ 7 おおやまどう 大山道	ページ 13 きょう づ みち 京 所 道
ページ 3 こうしんみち 庚申道	ページ 8 ひがしおおやまどう 東 大山道	ページ 14 や わた みち 八幡道
ページ 3 ないとうみち 内藤道	ページ 9 お か り ば どう 御狹場道	ページ 15 い か だ 道
ページ 4 よこかいどう 横街道	ページ 9 しも が わらみち 下河原道	ページ 16 お だ ぶんみち 小田分道
ページ 5 わた や みち 綿屋道	ページ 10 しば ま みち 芝間道	ページ 17 わた みち 渡し道
ページ 5 ほんしゅくきたうらみち 本 宿 北裏道	ページ 11 ぐんやくしよとお 郡役所通り	ページ 18 た ん みち 田んぼ道
ページ 6 ほんしゅくみなみうらみち 本 宿 南 裏道	ページ 12 ていしゃ ば みち 停車場道	
ページ 6 ばん ば きたうらみち 番場北裏道	ページ 13 ほそ ま かけ ま 細馬・駆馬	

※それぞれの地図は、^{ち ず}国土地理院のウェブサイト (<https://maps.gsi.go.jp/>) から引用・加工をしています。



ぼくが知っている道の名前とは違うところもあるよ。

同じ道でも時代によって呼び方が変わるんだね。
なかには場所が変わったり、無くなってしまう道もあるんだよ。



な ら は し み ち 奈良橋道

『奈良橋道』は、市内の北部（武蔵台3丁目辺り）を北西に向かって斜めに通っている道です。この道は東大和市奈良橋まで続いていたことから『奈良橋道』と呼ばれていました。市内の北部を東西に通っている『多喜窪通り』の「武蔵台2丁目交差点」辺りから北西に進み『新府中街道』を越えた市境までが『奈良橋道』です。昭和57（1982）年4月に府中市によって名称が認定されて現在は『奈良橋通り』の名称で呼ばれています。



また、東大和市には『府中道』という名前の道があったようです。東大和市内で『青梅街道』と『新青梅街道』（むかしは江戸街道と呼ばれていました）が出会う「奈良橋庚申塚交差点」の近くには小高い塚があって、その上に庚申供養塔があり、道しるべとしての役

わり割もしていました。これは享保11（1726）年に置かれたもので、台石には「南府中道」と刻まれていて、この付近から府中へ向かう人がいたことが分かります。昭和42（1967）年に『新青梅街道』の道を広くする工事が行われた時、この庚申供養塔は東大和市内にある雲性寺（東大和市奈良橋1丁目）の山門の下に移されました。この他に「鹿絵図」という古い絵図には「府中道」と書かれている道が他にもあります。もしかすると府中と奈良橋の間には人々の交流が多かったのかもしれ



＜東大和市奈良橋付近の地図＞

れません。

庚申・・・むかしは干支を使って日にちを数えていました。その57番目に巡ってくる日が「庚申」です。この日に行なわれた民間信仰が、江戸時代に広がった「庚申信仰」です。「三尸」という虫が人の体から抜け出して、その人の悪事を伝えるとか、その虫が寿命を縮めるともいわれており、これを避けるために一晩中起きて、行事を行います。仏教では青面金剛を、神道では猿田彦を祀り、塚や供養塔がつくられることもあります。

こうしんみち 庚申道

『庚申道』は『甲州街道』沿いにある熊野神社の西側の「西府町二丁目交差点」から北へ進み、『内藤道』との分岐点にある庚申塔のある場所から北西へ向かう道です。この道の名前は庚申塔に由来しますが、他にも『わらつけ道』『いな道』『寺道』の名があります。小平市小川町や立川市砂川辺りでは、養蚕が盛んで、府中市や稲城市方面へわらを買いに来ていました。そのわらを、大八車と呼ばれる荷車につけて帰った道なので『わらつけ道』

の名がついたともいわれています。『いな道』とは、信濃（現在の長野県）の伊那へ行く道だからとも伝えられています。あるいは、あきる野市伊奈とも考えられています。また、今は廃寺となっていますが、熊野神社の西側に弥勒寺という寺がありました。『寺道』の名は、この寺の西側を道が通っていたことから

ついたものかもしれません。

第十中学校の北側を
通っているので、昭和57（1982）
年4月に市では『10中通り』
という名で認定しました。



＜西府町にある庚申塔＞

ないとうみち 内藤道

『内藤道』は「西府町二丁目第二交差点」からはじまっています。この辺りに住む人が国分寺村の内藤新田へ行く道だったことからこの名前になったといわれています。明治時代まで沿道はほとんど畑と雑木林だったそうです。第七小学校の西側を通っていることから、昭和57（1982）年4月に市では『7小通り』という名で認定しました。



よこかいどう 横街道

『横街道』の名前は、この道が『甲州街道』と平行して、府中市の北部を横断することに由来します。

むかし、この道の北側には尾張徳川家の御鷹場がありました。『四街道』とも言われますが『横街道』がなまったものという説があります。また、人見村（現在の若松町3、4丁目）の古図には『いなみち』という名で書かれています。この道は、府中市を西へ出ると立川市の南を通り、昭島市拝島町辺りを抜けて、あきる野市伊奈に続いていたようです。そのため、幕末頃は『拝島道』や『伊奈道』と呼ばれていました。

昭和57（1982）年4月、市はこの道の名前を西側から『横街道』、『学園通り』、『浅間山通り』（一部）、『多磨町通り』と認定しました。『学園通り』には、第九小学校や新町小学校、第六小学校、第五中学校、都立府中高校、東京農工大学、明星学苑があるためこの名がつきました。また『学園通り』沿いは、アオギリやトチノキの並木になっています。



鷹狩り・・・飼慣らした鷹を使って野鳥などをつかまえる狩りのことです。武蔵野の広大な地域は、寛永10（1633）年に尾張徳川家の御鷹場とされ、府中市域もその中に含まれました。御鷹場の境には塚が築かれ、その上に「従是東西北尾張殿鷹場」の文字が刻まれた石の杭が建てられていました。この杭のひとつが郷土の森博物館に保管されています。

＜御鷹場があったことを示す石の杭＞



わた や みち 綿屋道

『綿屋道』は『甲州街道』と『旧甲州街道』が交わる「本宿交差点」から北へ進み『東八道路』の手前までの道のりで、途中に本宿小学校が西側に見えます。本宿小学校の横の綿屋道由来碑には「甲州街道からこの道に入る角にある綿屋に由来」とあります。明治時代の初め頃に綿屋（ふとん屋）が開業したので『綿屋道』というようになったそうです。その前は、ゲントー（もしくはゲンドー）という医者^{いしや}がいたことから『ゲントー道』と呼んだとのいい伝えもあります。

昭和57（1982）年4月に『本宿小通り』という名で市は認定しました。

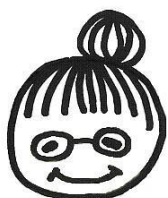


ほんしゆくきたうらみち 本宿北裏道

『本宿北裏道』は本宿村を通っていた『甲州街道』の北側にあった屋敷の裏道だったことに由来します。『甲州街道』の一本北側にあり、平行する形で東西に延びた道です。本宿は、現在の西府町2丁目、本宿町2丁目、美好町3丁目のそれぞれの一部（旧甲州街道沿い）に集落の中心があったそうです。



本宿とは「もともとの宿場」という意味が由来であるという説があります。それは甲州街道が整備されるよりも前に、さらに南側を通っていた『甲州古街道』の道沿いに宿場があったといわれているからです。昭和57（1982）年4月に『本宿北裏通り』という名で市が認定しました。



甲州古街道については、こども府中はかせ9「府中の街道」4ページを見てね。

ほんしゅくみなみうらみち

こうしゅうかいどう みなみがわ ほんしゆく
『甲州街道』の1本南側にあり『本宿』

きたうらみち たいしょうぎ
北裏道』と対 称 的 な道です。「西府駅入口

こうさてん ぶ きん なんぶせん せんろ
交差点」 付近から西へ、 南武線の線路の手

前までの道です。本宿町と西府町をとおって

ち いき きたがわ ほんしゆく
います。西府町地域公園の北側にある本宿

みなみうらみち ゆ ら い ひ ほんしゆくむら こうしゅうかいどう
南 裏道由来碑には「本 宿 村の甲 州 街道

みなみがわ や しき うらみち ゆ らい
南 側屋敷の裏道に由来」するとあります。

ほんしゅくきたうらどお どうよう しょう わ
『本宿北裏通り』と同様に、昭和57



(1982) 年 4 月に『本宿 南裏通り』の名前で市が認定した道です。

ばん ば きたうらみち

ばん ば きたうらみち
『番場北裏道』は宮西町、片町、

美好町にまたがっています。『旧きゆう

こうしゅうかいどう きたがわ しも
甲州街道』の一本北側の道で、下

が わらりよくどう こう さ あた ゆ らい ひ
河原 緑 道と交差する辺りの由来碑

には「^{こうしゅうかいどう}甲州街道と^{へいこう}平行し、^{ばんばきた}番場北

がわ や し き ち うらがわ
側の屋敷地の裏側を通る道」とあ



ります。番場は、今の宮西町 2、4、5 丁目の一部（旧甲州街道沿い）に集落の中心があった宿場で

した。寛永^{かんえい}13（1636）年に番場^{ばんば}宿^{しゆく}と呼ぶようになったようです。昭和^{しょうわ}57（1982）年4月に『番場^{ばんば}

かたまちきたうらとお にんてい
片町北裏通り』という名で市が認定しました。

ばんば ばんば
番場という地名の由来は、馬場（馬が

はっおん
走るところ)の発音が変わったという

せつ ばんしよ み は ば
説や、番所（見張り場）があったから、

などの説があります。



＜番場北裏道由来碑＞

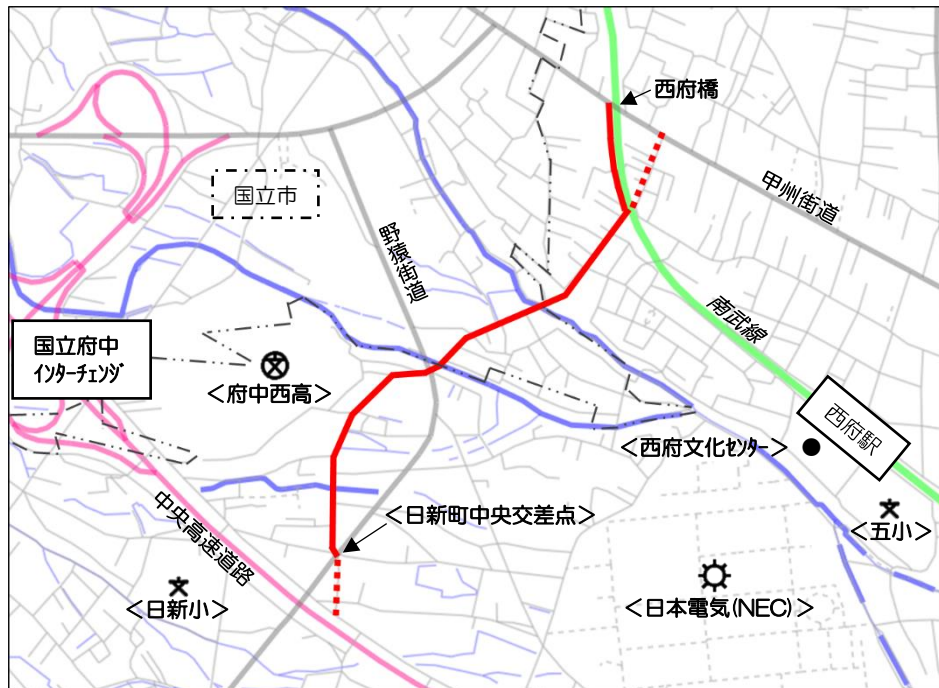


おおやまどう 大山道

『大山道（大山街道）』は南北に
延びる道で、四谷と『甲州街道』
をつなぐことから『四ツ谷街道』
とも呼ばれていました。

現在は、西府町の西府橋から南
武線に沿う形で始まっています。

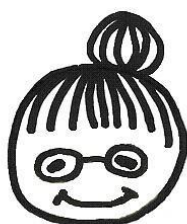
『大山道』を南へ進むと、一旦、
府中市を出て国立市を通り、日新



町で府中市に戻ってきます。ここで『野猿街道』を越えて、さらに進むと「日新町中央交差点」で、再び
『野猿街道』と交わるところで道は終わっています。むかしは、このまま南へ道が続いており、多摩川を
渡り、相模国大山（現在の神奈川県伊勢原市）にある大山阿夫利神社までつながる道だったようです。

「大山」とは古くから雨乞いのために信仰されていた山で、江戸時代には庶民の間で、大山阿夫利神社
へ参拝しに行く「大山詣り（詣で）」が流行しました。このときに関東各地からの参拝者が通った道は
「大山道（大山街道）」と呼ばれ、今でも残っているルートがあります。府中市のこの『大山道』の名前も
そのことに由来し、特に本宿の辺りで呼ばれていました。昭和57（1982）年4月には『大山道』の名
前で市が認定しました。

写真に見えるフェンスの向こうは
南武線の線路です。この辺りは、
線路が敷かれてから新しくできた
道で、もとは地図の点線のルート
を通っていたようです。



＜西府橋付近の大山道＞

ひがしおおやまどう いちのみやみち
東大山道 (一之宮道)

『東大山道』はむかし『一之宮道』と呼ばれていた道で、多摩川の対岸の一の宮（現在の多摩市一ノ宮）へ通じる道だったため、あるいは大國魂神社例大祭で一之宮・小野神社の神輿が通る道だったため、その名前がついたと考えられています。

東西に延びる道で、^の 現在は分梅町 5 丁目付近で^{げんざい} 鎌倉街道から分かれる形で始まり、^{ふ きん} 四谷で『^{かまくらかいどう} 野猿街道』^わ ^{はじ} ^{や えんかいどう}

に合流します。『野猿街道』を
 南へ進むと四谷橋があり、多
 摩川を渡った先は日野市落川
 のため一ノ宮にはつながって
 いません。しかし、むかしは
 多摩川を渡る位置が今と違い
 ました。当時は『七生道』（日
 野市域にあった七生村へ通じ
 る道）から、南へ進んだ先の
 「一の宮渡し」を使って多摩



川を渡り、一の宮へ行っていたようです。

しょう わ ひがしおおやまどう にんてい
昭和57（1982）年4月に、市が『東大山道』の名前で認定しました。



＜四谷文化センター付近の東大山道＞

いち みやわた わた
一の宮渡し・・・「渡し」とは川を
わた ふね い き
渡るための舟が行き来する場所の
ことす。 いち みやわた
「一の宮渡し」は四谷と
たまがわたいがん いち みや げんざい た ま し
多摩川対岸の一の宮（現在の多摩市
いち の みや わた
一ノ宮）をつないでいた渡りで、
いち みやむら かん り
一の宮村が管理していたことから
その名前が付けられました。 しょう わ
昭和
12（1937）年の関戸橋開通まで
つづ
続いていたようです。

おかりばどう 御猟場道

この道は、以前『^{いぜん かりばどう しせん}猟場道支線
^{めいしやう}21号』という名称でしたが、
^{しやうわ}昭和57（1982）年4月、市
は『^{おかりばどう にんてい}御猟場道』と認定しました。
道の名前の由来は^{ゆらい か とお}狩りで通った
道ということから呼ばれたのか



もしれません。「かり」の字は「狩」を使う場合もあります。また、草などを刈る場だったので「刈場」だ
とする説もあります。「分梅 駐 在所交差点」から始まり、日本電気（NEC）府中事 業 所正門（日新町 1
丁目）付近までの道です。むかしは西側に『市街道』、東側に『鎌倉街道』へと続いており、この道筋は
『^{こうしゅう こかいどう}甲州古街道』と呼ばれる道でした。道沿いの「^{みちぞ いちかわようすい}市川用水」は、今ではコンクリートでおおわれていて、
その上の部分は「^{ふぶん としゅうほう}第二都市遊歩道」として利用されています。

しもがわらみち 下河原道

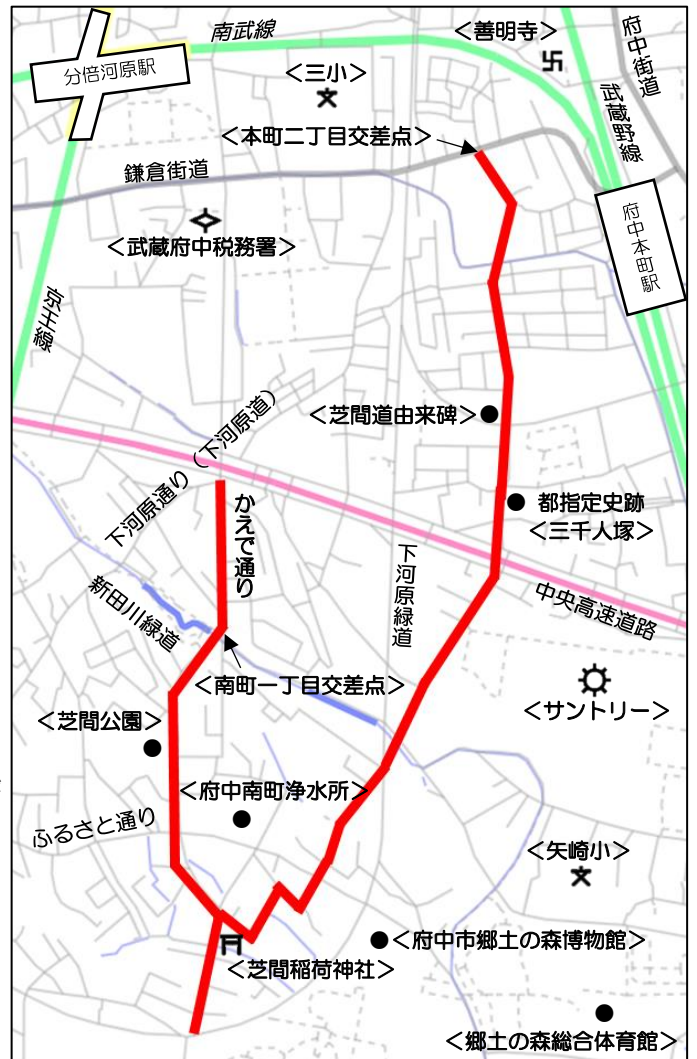
『^{しもがわらみち ほんまち しゅうらく げんざい}下河原道』は本町の集落（現在の本町 1、2 丁
目の一部、宮西町 2 丁目の一部）から下河原（現在の
南町 4、5 丁目の一部）へ通じる道だったことに
由来しています。『^{しんぺん ぶさしふ どきこう}新編武蔵風土記稿』によると、下
河原の地名は地形に由来しているようです。また、
中河原から見て多摩川の下流の集落だったので、
下河原となったという説もあります。『下河原道』は
「^{こうさてん}三小前交差点」からはじまります。道なりに南へ
進むと、途中に^{とちゅう しもがわらみち ゆらいひ}下河原道由来碑があります。「本町
西交差点」から『^{かえで通り}かえで通り』を少し南へ進み、西
へ曲がります。そのまま直進して南町交番付近で道は終わります。交番のとなりには下河原八幡神社と南
町第 3 公園があって、園内に^{えんない しもがわら ちめい ゆらいひ}下河原の地名由来碑があります。



しば ま みち 芝間道

『芝間道』は芝間（現在の南町 1、5、6 丁目の一部）へ通じる道ということに由来しています。西側を通る『下河原道』の「上の道」に対して、『芝間道』は「下の道」とも呼ばれています。芝間の地名は「芝地の場所」である「芝場」から変化したのかもしれませんが。『芝間道』は「本町二丁目交差点」から「芝間稻荷神社」辺りまでの南北に延びる道です。進んで行くと芝間道由来碑や「都指定史跡 三千人塚」があり、そこを過ぎたあたりから、少しずつ西へ向かいます。

また『下河原道』の途中から芝間へ向かう道も『芝間道』と呼ばれていました。現在の『かえて通り』と『下河原通り』の交差点から、南へ進み「南町一丁目交差点」から南西の道へ入ります。芝間公園を過ぎて



『ふるさと通り』を越えると、芝間稻荷神社前で東側からやってくる『芝間道』と合流します。



＜芝間稻荷神社＞



＜芝間道由来碑＞

ぐんやくしよどお 郡役所通り

『旧 甲 州 街 道』と『府 中 街 道』が交わる「府中市役所
前交差点」を少し 東 側に行ったところから北に向かって延
びている道です。この道は北に進んで『甲 州 街 道』を抜け、
左手に第一小学校、右手に府中 消 防 署・中央防災センター
のある道をさらに北に進み『富士見通り』、『美 術 館 通 り』、
『学園通り』を抜けて「栄町交番前交差点」のある『東八
道路』へ続いています。また、道の 東 側に「称 名 寺」が
あったため、この道の宮西町から寿町辺りまでは『称 名 寺
道』とも呼ばれていました。明治18（1885）年から郡制が
廃止されるまでの間「北多摩郡役所」（宮西町 1 丁目）が通



りの西側にあったことからこの名前で呼ばれていました。その後「北多摩郡役所」があった場所には 昭 和
17（1942）年に「北多摩地方事務所」が建てられました。「北多摩地方事務所」は 昭 和 46（1971）
年まで存続し、現在は「東京都府中合同庁舎」があります。また、大 正 12（1923）年に郡制が廃止さ
れて建物が役目を終えると、大 正 14（1925）年に現在の市役所がある場所（宮西町 2 丁目）に移され
て府中尋 常 高 等 小 学 校の一部として使われるようになりました。昭 和 11（1936）年に小学校が移転
すると、消 防 署などとして使われました。その後、市役所新 庁 舎が建設されることになって 昭 和 29
（1954）年に 消 防 署が新築されて移動すると、取り壊されてしまいました。



＜東京府北多摩郡役所＞

おおくにたまじんじや おおとり い
大國魂神社の大鳥居の前から北へ向かっているこの

ていしゃ ば えき そうしやじょう しんごう き ふく
道は停車場（駅だけでなく操車 場 や信号機などを含

よ かた こくぶん じ
めた呼び方）のあった国分寺へつながっていたため、

こくぶん じ かいどう よ てい
『国分寺街道』とも呼ばれていました。そして、停

しゃ ば みち おおとり い おおくにたまじんじやまえこう さ てん
車場道のうち、大鳥居のある「大國魂神社前交差点」

おおくにたまじんじや いち とり い
から、かつて大國魂神社の一の鳥居があった「けやき

なみ き きたこう さ てん くにしていてんねん き ねんぶつ ば ば だいもん
並木北交差点」までは「国指定天然記念物 馬場大門

なみ き おおくにたまじんじや さんどう
のケヤキ並木」です。大國魂神社の参道でもあるこの

つうしょうめい なみ き どお
道は、市の道路で通 称 名は『けやき並木通り』です。

しょうりやく なみ き よ
中には 省 略 して『けやき並木』と呼ぶ人もいます。

え ど じ だい しょうつ むさしめいしょう す え
また、江戸時代の書物『武蔵名 勝 図絵』によると、

だいもんみち よ
むかしは『大門路』とも呼ばれていたようです。



府中町道路元標・・・「大國魂神社前交差点」にある東側の横断
 歩道の南側脇には「府中町道路元標」があります。道路元標は
 道路の起点（始まりの地点）、終点（終わりの地点）を示すものです。
 大正8（1919）年に旧道路法で各市町村に1つ置くように決めら
 れ、翌大正9（1920）年に設置されました。現在の「府中町道路
 元標」は、平成2（1990）年3月に当時のものを復元したものです。



ほそ ま かけ ま 細馬・駆馬

おおくにたまじんじゃけいだい ひがしがわ くに してい
大國魂神社境内の 東 側の道（国指定

し せきむさしこく ふ あと こく が ち く おおくにたまじんじゃ
史跡武蔵国府跡(国衙地区)と大國魂神社

あいだ とお ほそ ま にしがわ
の間にある通り)を『細馬』、西側の道

(府中市役所とふるさと府中歴史館の間

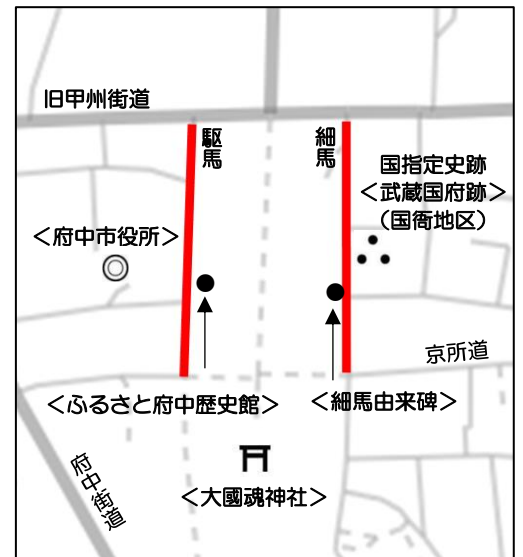
にある通り)を『駆馬』といいます。ど

ちらも優 秀 な馬という意味です。朝 廷

への貢ぎ物とする馬を試しに走らせた馬場だったことに由来しています。



＜細馬由来碑＞



きょう づ みち 京 所道

きょう づ げんざい
京 所は、現在の宮町2丁目の

一部、3丁目に中心があった 集

落です。ここは六所宮（大國魂

神社）の領 地で八幡 宿 に含ま



れており、『新編武蔵風土記稿』には「六所社 領」と書かれています。地名の起こりは、経 所がなまった

ものといわれており、ここに国府の写 経 所（お 経 などを書き写すところ）のような施設があった名残り

だと伝えられています。京 所のように「京」のつく地名は、

国府の所在地には多くあります。『京 所道』の名は、この道

が京 所の中心を通ることに由来します。昭 和57（1982）

年4月に市は『京 所道』の名で認定しました。この道は江戸

時代の慶安（1648～52年）頃に甲 州 街道が開設されるま

で、初期の甲 州 への道として使われていました。



＜大國魂神社近くの京所道＞

「京所」は「きょうず」と
読む場合もあるようです。





『八幡道』の名前は、この道が「国府八幡宮」のそばを通ることによって由来します。奈良時代に日本を統治していた聖武天皇は各地に国府を置くにあたり、その守り神として一国につき一社、八幡宮を建てたと伝えられています。「国府八幡宮」は、この地にあった武蔵国府を守るために建てられた大國魂神社の境内の外にあるお社です。そのため、本殿は国府があった西の方角を向いています。『旧甲州街道』に面した参道の入口に武蔵府中郷土かるたの「⑧松を立てない正月飾り」の標識が立っています。『旧甲州街道』から続く長い参道の途中で、京王競馬場の線路が横切り、鳥居と電車を一緒に見ることができます。

『八幡道』は『競馬場通り』から『馬坂』を上り、東に向かう道の入口から始まります。住宅地を抜けると左手に「国府八幡宮」が見え、木々に囲まれた緑の道となります。現在では、日吉町体育館付近でむかしの道が途切れています。この先に続く道は、「清水が丘一丁目交差点」の西側辺りから、東へ進み京王線の踏切を渡って『品川街道』に合流するところまでだったのではないかと考えられています。



＜国府八幡宮二の鳥居と京王競馬場線＞



＜国府八幡宮回り＞

[illegible]

A black and white photograph of a dirt road lined with tall, slender trees, creating a canopy overhead. The road is flanked by a wooden fence on the right.

お だ ぶんみち
小田分道

『小田分道』は「白糸台文化センター西交差点」の辺り
から南へ進み多磨霊園駅の踏切を渡り「東郷寺下交差点」を
通って、是政文化センター付近までの道です。『小田分道』
の名は、この道が小田分村を通る道であったことに由来して
います。

お だ ぶん しゅうらく げんざい みぞあいじんじや
小田分の 集 落は、現在の小柳町2丁目の一部（溝合神社
みなみがわあた お
南 側辺り）に中心がありました。地名の起こりは、この土
おおくにたまじんじや しんしよく お だ し しよりょう
地が大國魂神社の神 職 だった織田氏の所 領 だったことに
お だ ぶんしゅうへん つねひさ これまさ
よるといわれています。小田分 周 辺の地名には常久や是政
かんけい
など人名に関係があると伝えられるところが多くあります。

お だ ぶん いしがみさま いし い じんじゃ
小田分には石神様と呼ばれている「石井神社」があります。

じんじゃ り やく れいまい
この神社は、百日ぜきにご利益があり、古くからお礼参りに

ほうのう よ した
しゃもじを奉納したことから「おしゃもじさま」と呼ばれ親

しまれていました。

道治^{みち ぞ}いには昭和^{しょうわ}14（1939）年に建てられた「東郷寺^{とうこうじ}」があり、『東郷寺通り^{とうこうじとお}』とも呼ばれています。



＜石井神社＞



＜地名の由来碑＞

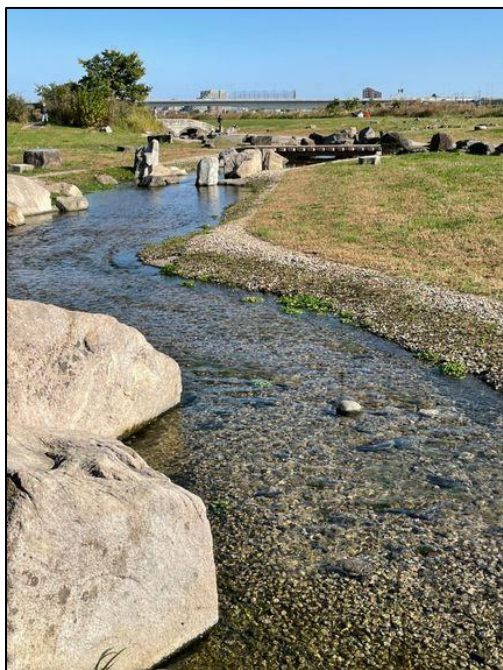


＜道の由来碑＞

わた みち 渡し道

『渡し道』は、白糸台4丁目付近から南へ下り、小柳町5丁目の多摩川までの道です。『渡し道』の名はこの道が「常久渡し」へ行く道だったことに由来しています。「常久渡し」は向こう岸の常久南部（現在の稲城市）への渡しです。また、多摩川の砂利が運び出されるようになると、北多磨駅（現在の白糸台駅付近）までトロッコ線が敷かれたので『トロッコ道』と呼ばれることもありました。現在は、第六中学校の横を通る道なので『6中通り』と呼ばれています。

常久渡し由来碑から土手を越えると、河川敷には『多摩川親水公園』があります。



＜多摩川親水公園＞



＜常久渡し由来碑＞

常久は、現在の若松町1丁目の一部（旧甲州街道沿い）に集落の中心がありました。もとは多摩川のほとりに集落がありましたが、洪水によって流されて、万治年間（1658～61年）にハケ上に移動したと伝えられています。地名の起こりは、小田分と同じように、人名に由来するようです。

た みち 田んぼ道

南白糸台小学校の正門前にある由来碑から、
多摩川に向かって南に延びている道です。こ
の道は旧 車 返 村の東部（現在の白糸台 5、
6 丁目辺り）から押立へ行く本道で、田んぼ
の中を通っていたことが名前の由来です。し
かし、この名前は 車 返 辺りだけの呼び方
だったようです。現在は、新しい道がさらに
南に延びて『多摩川通り』までつながり『押立
通り』と呼ばれています。昭和57（1982）
年4月には『押立通り』の名前で市の道路に
認定しました。

この道沿いにある押立神社には名木 百 選に
選ばれたクロマツとイチョウがあります。ま
た、そのむかし、押立文化センターの南あた
りから現在の稲城市方面へ向かう「押立渡し」
がありました。



＜昭和 30 年代の押立＞



昭和 49（1974）年



令和 3（2021）年

＜押立神社前から多摩川の方を望む＞



もっと知りたくなったら読む本のリスト

しよめい ほん なまえ 書名（本の名前）	ちよしゃ ほん か ひと 著者（本を書いた人）	しゅっぱんねん 出版年	ほん せ 本の背ラベル
いしづみ草紙 路傍の語り部たち 改訂版	ふちゅうし ぶんか ぶんか しんこうか へん 府中市文化スポーツ部文化振興課／編	2010	F29/1/
ふるさとの地名 ふるさと探訪シリーズ	ふちゅうし せいかつぶん か へん 府中市生活文化部／編	1987	F29/7/
ふるさとの道 ふるさと探訪シリーズ	ふちゅうし せいかつぶん か ぶんか しぎょうか へん 府中市生活文化部文化事業課／編	1989	F29/7/
府中市内旧名調査報告書 道・坂・塚・川・堰・橋の名前	ふちゅうし りつきょう どうかん へん 府中市立郷土館／編	1985	F291.3/10/7
府中の風土誌 第7版	ふちゅうし 府中市	1981	F21/7/
広報ふちゅう 昭和57年1月1日～昭和57年12月15日 ※4月15日（第562号）の記事	ふちゅうし きかくちようせい ぶ ちようほう か へん 府中市企画調整部広報課／編	1982	F318.5/10/3
府中市史 上・中・下巻	ふちゅうし し へん いんかい へん 府中市史編さん委員会／編	1979	F213/10/7
府中市の歴史 新版	ふちゅうし きょういく いんかい 府中市教育委員会	2006	F21/7/
府中まちあるきイラストガイド	かぶらぎ みなこ ちょ ／著	2021	F291.3/10/カ
武蔵名勝図絵	うえだ もうしん ちょ 植田 孟縉／著	1993	F291.3/01/ウ
東大和市史資料 編 9 道と地名と人のくらし	ひがしやまと し し へん いんかい へん 東大和市史編さん委員会／編	1999	F213/33/ヒ
国分寺市の民俗 4 駐車場の民俗 国分寺市文化財調査報告 第38集	こくぶんじ し きょういく いんかい へん 国分寺市教育委員会／編	1994	F380/25/3

さがしている本が見つからない時は、
図書館の人に聞いてみよう。



「府中の道」 こども府中はかせ No.12

2022年3月発行

府中市立図書館 編集・発行

<https://library.city.fuchu.tokyo.jp/>

